

年齢を重ねることの豊かさが伝わります

美智子さま 珠玉の お言葉集

皇后美智子さまのお言葉をたどっていくと、
気づかされることがあります。

日本語というものの美しさ、そして、年齢を重ねるとは
何て豊かなことなのだろうということです。

天皇陛下と共に歩まれた日々。

その一步一步が、小さな幸せの積み重ねとなり、

陛下の励ましのもと、確かな自信となり、

豊かな表現になる。そんなことが伝わる言葉集です。

取材・文：長谷川寿美子 構成：矢部万紀子（編集部） 写真提供：朝日新聞社
出典：『皇后陛下喜寿記念特別展 紅葉山御養蚕所と正倉院裂復元のその後』（宮内庁発行）から（19ページ）。
『新天皇家の自画像 記者会見全記録』（蘭部英一編、文春文庫）から（20、22ページの会見）。
その他は宮内庁のホームページなどから。



天皇ご一家がおそろいで「こどもの国」へ。真ん中には秋篠宮悠仁親王、左端に眞子内親王（平成21年）

「ばあば」の役回りを楽しむお姿と
蚕のお話から伝わる「次代につなぐ思い」

眞子内親王へのお手紙

このお手紙は、学校の授業で「お年寄りの世代の手仕事」について調べることになった孫娘、秋篠宮眞子さまのため、皇居の中で行われている養蚕について書かれたものです。

文面からは、進んで「ばあば」の役回りを引き受け、楽しむお姿が浮かんできます。「たいそう寒いので、スキーに行く時のように温かにしていってほしい」といった文章からは、美智子様のお声が聞こえてくるかのようです。

美智子さまは、それぞれの年代で自身の年齢を、おおらかに受け入れてこられました。女性の厄年である42歳の誕生日前の会見では、「私は（年齢を）気にしていませんが、私の誕生日に記事が新聞に出ると、同級生から嫌がられるんですよ。歳がわかってしまうと」と話され、記者団の笑いを誘いました。

養蚕のために育てられた蚕は繭の中で短い一生を終えますが、残した繭は絹織物となり、永らえます。人も老い、死にゆく生き物ですが、世代から世代へと受け継ぎ、残せるものはあるはず。そんなメッセージを読み取ることもできるかもしれません。

学習院初等科
3年生の
眞子さまへ

眞子ちゃん

眞子ちゃんは、ばあばがお蚕さんの仕事をする時、よくいっしょに紅葉山のご養蚕所にいきましたね。今はばあばが養蚕のお仕事をしていきますが、このお仕事は、眞子ちゃんのおじ様のひいおば様の昭憲皇太后様、おば様の貞明皇后様、そしてお母様でいらつしやる香淳皇后様と、明治、大正、昭和という三つの時代をとつてばあばにつたえられたお仕事です。

（中略）蚕は、どうしてか一匹、二匹とはいわず、馬をかぞえるように一頭、二頭と数えることを眞子ちゃんはごぞんじでしたか？ あの時、眞子ちゃんといっしょに給桑をした二かいの部屋には、たしか十二万頭ほどの蚕がいたはずですよ。眞子ちゃんはどう万という数を習いましたか？

少しけんとうのつかない大きな数ですが、たくさんたくさん蚕があそこについて、その一つ一つが、白や黄色の美しいまゆを作ります。

（中略）さくねんは、ひいおば様のお喪中で、蚕さんのお仕事がいっしょに出来ませんでした。が、おとし眞子ちゃんは、このまゆかきの仕事をずいぶん長い時間てつだって下さり、ばあばは眞子ちゃんはたいそうはたらき者だと思いました。サクツ、サクツと一回ごとによい音がして、だんだんと仕事のリズムにのってきて、また、今年もできましたらお母様と佳子ちゃんとおてつだいにいらして下さい。

（中略）この間、昔のことや家で使っている古い道具についてお話ししておたのまれしていただいたのに、暮れとお正月にゆつくりとお会いすることができませんでしたので、思いついたことを書いてお届けいたします。今は蚕さんはおりませんが、もう一度場所や道具をごらんになるようでしたら、どうぞいらつしやいませ。たいそう寒いので、スキーに行く時のように温かにしていってほしい。

ごきげんよう

眞子様

ばあば